

震災ボランティア活動と キリスト教教育に関する質的研究

岡村直樹

- 1) 研究の出発点と意義
- 2) 研究方法と研究対象者
- 3) 結果
- 4) 分析
- 5) 提言

1、 研究の出発点と意義

2011年3月11日に宮城県牡鹿半島の東南東沖約130kmの海底を震源として発生した巨大地震は、日本における地震観測史上最大のマグニチュード9.0を記録し、岩手県、宮城県、福島県の沿岸部を中心に未曾有の大災害をもたらした。警察庁によれば、2012年8月22日の時点で死者は15,868人、重軽傷者は6,109人、警察に届出があった行方不明者は2,848人で、また被害額の総計は20兆円を優に超えるであろうとも言われている。そのような中、社会福祉法人全国社会福祉協議会は東北三県各地のボランティアセンターに登録したボランティア活動従事者の延べ人数は、震災より約5ヶ月後の2011年8月21日の時点で686,800人に達したと発表した。震災からの復興が、ボランティア活動によって広く支えられていることがわかる数字である。一方で、同年6月30日付け

の産経新聞では、その時点での東日本大震災のボランティア活動における学生ボランティアの占める割合が約2割で、阪神淡路大震災時の6~7割と比べて非常に低い事が伝えられている。時期的な要因や地域的な違い、また特に震災直後に起こった原発事故の影響等がその理由として考えられるが、大学生のボランティア活動はもっと奨励されてしかるべきではないかという意見が各所から聞こえてきている。そのような声とは裏腹に、本研究の研究者が教鞭を執る東京基督教大学をはじめ、多くのキリスト教系大は、震災後の早い時期より、積極的に学生をボランティアとして被災地に送り届けたのも事実である。当然のこととして、ニュース報道等を通して被災地と被災者に様々なスポットライトが当てられる中、ボランティア学生を送り出す側の人間である本研究の研究者が、あまり注目を浴びることのない、送り出された学生の現地での体験や、彼らの心の中に起こった変化等について興味を持ったことが、本研究が始められるきっかけとなった。本研究は以上の背景をふまえ、質的研究の方法、特にグラウンデッドセオリーを用い、東日本大震災の被災地にボランティアとして入った東京基督教大学の学生の体験の記録とその分析を通し、以下の3つの目標に向けて実施された。

- ① 歴史的大地震の被災地にボランティアとして足を踏み入れた学生の生の声を記録し、資料として残す。
- ② ボランティア活動に従事した学生に起こった内面的変化を、宗教性や信仰心の「発達」という観点から分析する。
- ③ キリスト教教育の観点から、震災ボランティア活動の意義を検証する。

本研究は、現時点に至るまで、比較的取りあげられることの少ない、ボランティア学生の体験と、それに伴う内面的変化に焦点が当てられている点、またキリスト教教育におけるボランティア活動の意義を考察するという2点において、意義があると思われる。

2、研究方法と研究対象者

本研究は、Michael Quinn Patton の著書、Qualitative Research and Evaluation

Methods に記述されたグラウンデッドセオリーのガイドラインに沿って実施された¹。グラウンデッドセオリーは、アンケート等を通して量的なデータを収集し、それらを数的に分析する、いわゆる量的研究とは異なり、対象者を広く浅く学ぶのではなく、研究対象者や対象とする様々な現象を深く掘り下げ、より狭く、より深く学ぶことに焦点を当てた質的研究に属する研究方法である。グラウンデッドセオリーは、量的に表すことの難しい宗教心、信仰心、感情、心の動き、対人関係といった分野において、特にその力を発揮する研究方法論であることが近年認められつつある研究方法論であり、それはデータ収集、データ分析、理論構築という3つの主な段階から構築されている²。また質的研究では、より質の高い研究の実施に向け、データの収集、およびデータ分析にTriangulationの方法が用いられることが多い。Triangulationとは、多角性を表す言葉で、それは様々なアングルからのデータ収集と、同様のデータ分析の必要性を表している。本研究では、研究参加者の個々のリアクションや、グループディスカッションの内容に着目した多角的なデータ収集が行われ、同時に、人間の内面性の表れでもある非言語コミュニケーション、すなわち研究対象者の語調、顔の表情、体の動き、視線等もが重要なデータとして記録された³。データ収集後、研究者は理論の構築に進むために、データ分析を通じてさまざまなカテゴリー（まとめ、又は概念）を生成し、それらを組織化していくこと、言い換えれば、収集されたデータを一端バラバラにし、新しく組み替えて再構築する作業を実施した⁴。その後の分析もやはりTriangulationの方法を用い、宗教学、社会学、心理学という、複数の観点からなされた学術研究結果を参考にしつつ実施された。

質的研究方法に属するグラウンデッドセオリーは、非常に限られた地域で、限られた人数を対象に行われているため、研究の結果を直ちに広く一般化

¹ Michel Quinn Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods* (Thousand Oaks, California, Sage Publications, Inc., 2002), pp.124-127.

² Anselm Strauss and Juliet Corbin, *Basics of Qualitative Research* (Thousand Oaks, California, Sage Publications, Inc., 1998), p.12.

³ Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods*, P.247.

⁴ 木下康仁『ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法』(弘文堂、2007年) 209-216 頁

することが出来るという性質の研究ではない。さらに時の流れと共に、研究対象者もまた研究対象者を取りまく社会も変化することから、研究結果の実際の有効期間も様々である。質的研究の方法は、量的研究が取り組む事を躊躇する領域に足を踏み入れ、現場に根ざした質的なデータを重視し、リアリティをもってそれらを詳細に記述することを通して、現象の本質を追い求めることをその本分としている。質的研究の結果は、量的研究のそれと対比させ、二項対立の図式の中でその優劣が競われるべきものではなく、研究の目的を果たす為にあらゆるデータを活用するというスピリットの中で、説得力を持つ実践的な取り組みの手掛かりとして活用されるべき類のものであろう⁵。

本研究の初期段階で研究対象者となったのは、東日本大震災のボランティア活動に加わった大学生 23 名で、研究者が教鞭を執る東京基督教大学において募られた。まず彼らにボランティア活動について、簡単に記述してもらい、その中から、均質サンプリング (Homogeneous Sampling) 方法のガイドラインに沿って研究対象者が絞り込まれた⁶。サンプリング (Sampling) とは量的研究のように大人数を研究の対象とすることの出来ない質的研究において、より意図的 (purposeful) に研究対象者を選択しようとするプロセスを指す言葉である。均質サンプリングとは、いくつかの共通条件をつけて研究対象者を絞り込むことで、一定のサブグループをより深く知ろうとする際に頻繁に用いられる方法である。今回均質サンプリングの方法を用いて選択されたのは、東京基督教大学に在籍する 2 年生と 3 年生の 9 人 (男性 3 名、女性 6 名) で、そこには以下の 5 つの共通点が存在する

- ① 今回初めて災害ボランティア活動に参加した学生であること。
- ② 震災以降、50 日以内に、ボランティア活動に参加した学生であること。
- ③ ボランティア活動の場所は、岩手県、宮城県、福島県 (東北三県) のいずれかであったこと。
- ④ 実際に被災地を目の当たりにし、また被災者とのコンタクトがあったこと。

⁵ 萱間真美『質的研究実践ノート』(医学書院、2007年) 3頁、51頁

⁶ Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods*, p.235.

- ⑤ ボランティア活動終了時から 1 ヶ月以上が経過していること。

本研究の初期段階で研究対象者となった学生の中には、以前「阪神・淡路大震災」や、他の自然災害においてボランティア活動に参加した学生が見受けられた。研究参加者の共通条件を①としたのは、以前の自らのボランティア体験と今回の体験を対比させる形での考察を促すのではなく、学生にとって初めての災害ボランティア活動に限定したデータを収集する意図からである。研究参加者の共通条件を②③④としたのは、震災の爪痕が色濃く残る時期に、特に被害が甚大であった地域で、実際に被災者とふれあった体験を持つ学生からのデータを収集する意図からである。研究参加者の多くは、大学主催によるボランティア活動に参加した者であるが、別団体が主催したボランティア活動に参加した者も複数いた。研究参加者の共通条件を⑤としたのは、研究参加者の宗教性や信仰心の変化に焦点を当てるとい本研究の性格上、学生がボランティア活動から戻った後、しばらく時間が経過しており、その間の変化をデータとして収集するという意図からである。9名のボランティア活動後の実際の経過期間は、最長で約2ヶ月、最短で1ヶ月であった。以下に本研究に参加した学生のボランティア活動に関する基本データを列記する。

学生 (A) 日程: 3月下旬~4月初旬、場所: 東松島市、南三陸町、内容: ドロの掻き出し、家具出し、炊き出し、支援物資の配布

学生 (B) 日程: 4月下旬から5月上旬、場所: 仙台市、内容: ドロの掻き出し、石灰撒き

学生 (C) 日程: 3月下旬~4月上旬、場所: 東松島市、内容: ドロの掻き出し

学生 (D) 日程: 4月中旬、場所: 福島県いわき市、内容: 炊き出し

学生 (E) 日程: 3月下旬、4月中旬、場所: 東松島市、石巻市、内容: 後片付け、ドロの掻き出し、救援物資の仕分け、炊き出し

学生 (F) 日程: 3月下旬~4月上旬、場所: 東松島市、石巻市、内容: 物資の運搬と配給、炊き出し、ドロの掻き出し

学生 (G) 日程: 3月下旬~4月上旬、4月下旬~5月上旬、場所: 仙台市若林区、東松島市、南三陸町、内容: 水の運搬、倉庫の整理、救援物資の仕分け、

ドロの掻き出し

学生 (H) 日程：4月上旬、場所：仙台市、女川町、内容：支援物資の運搬

学生 (I) 日程：4月中旬、場所：東松島市、内容：ドロの掻き出し

インタビュー、及び小グループディスカッションでは、宗教心の変化に関するデータを収集するという意図から、ボランティア活動の「出発前」、「活動最中」、「その後」という時間の経過と、それに伴う変化を軸に質問を作成し、時系列でのデータ収集を試みた。グラウンデッドセオリーでは、研究者が自らの予見に頼らず、研究対象者が出来る限り自由に、また正直に語る事が出来るよう心がけつつ、質問の内容や、話しの導き方をオープンに保つことが要求されるが、本研究では Patton のガイドラインに従い、Open-ended Interview Question を用いて出来る限り自由に発言することが促された。インタビュー、及び小グループディスカッションにおいて、下記の3つの質問が基本形として用意された⁷。

- ①「震災ボランティア活動に参加しようと思ったきっかけや理由について自由に述べて下さい。」
- ②「被災地での体験を通して、どのような感想を持ちましたか。自由に述べて下さい。」
- ③「ボランティア活動から戻って、自分にどのような変化がありましたか。自由に述べて下さい。」

インタビューとディスカッションにおいては、上記の質問への自由な返答に対して、「それはどういう意味ですか。」「もうすこし詳しく話して下さい。」といった答えの明確化を促す質問をフォローアップとして行った。行動観察では研究参加者同士の会話や研究者とのやりとりの中で、本研究に関連性があると思われる非言語的なコミュニケーション、すなわち、語調、言葉の抑揚、表情等が記録された。また本研究では、誘導的質問を避け、自主的発言を促すという観点から、宗教的な事柄に対する発言を意図的に促す質問は用意されなかつ

⁷ Ibid., p.342.

た。研究参加者には出来るだけ自由に、そして何でも語ることが促されており、その内容はすべて彼らが自主的に選んだものである。

3、結果

本研究のデータ収集が実施されたのは、2011年6月14日から23日の間で、場所は本研究の研究者が所属する大学の食堂、及び教室である。インタビューやディスカッションの内容は、研究参加者の了解を得て電子レコーダーに記録された。音声データは研究者が文字に起こし、その回答の内容、頻繁に繰り返された言葉、また感情を込めて語られた言葉、といったカテゴリーを用いて分け、さらにコーディング法を用いてさらなるデータの細分化と生成を試みた。以下に収集されたデータから導き出された結果を6つの項目に分けて列挙する。

(1) まず「震災ボランティア活動に参加しようと思ったきっかけや理由について自由に述べて下さい。」という質問の答えから、研究参加者の多くに共通する、ボランティア活動参加のきっかけや理由が浮かび上がってきた。それらを大別すると、第1は、「何かしたい」、「何かしなければならない」という強い気持ちが起こったこと、第2は、被災者の身に起こっている事を実際に見てみたいと思う欲求が起こったことであった。具体的には以下のような言葉が語られた。

「テレビに映る被災者の様子を見て、行かずにはいられなかった。」

「同じ日本人が苦しんでいるのを見て、放っておけなかった。」

「震災の様子をテレビで見て、この事を人ごとにしたくないと感じた。」

「クラスメートがボランティアに行くのを見て、私も行かなくてはいけないと思った。」

「友人が積極的に募金活動に奔走するのを見て、自分は現地に行きたいと思った。」

「かわいそうと思うだけではなく、実際に行動すべきだという友人の発言に触発された。」

「私に出来ることが何かあるのではないかと思った。」

「自分たちでやれることは何だろうと、真剣に考えた。」